

(二)

舎監長の頃の思い出

宇都木 郁子

ミキ先生と過ごした数年は、私の青春まっさかりの十五才―二十三才、昭和二十八年から三十六年三月までの八年間です。

学園は古市から可部、そして中島へとめまぐるしく変わり、生徒数も多くなり、年々学園もりっぱに発展して行きました。八年の内六年間が寮生活でした。

先生とお話できるようになったのは研究科と師範科に在籍の時で、日本刺繍の作品も沢山あったけど出火で全部駄目になった。先生と一緒に呆然と立ちすくみ、近くの人達と抱き合って泣いた。火災から立ち上がる為に、以前にも増して労働は激しくなった。校長先生の指図の下で、私達も焼跡に立って真黒くなって働き続けた。先生の部屋は、二・三畳の天井の低い部屋で、寝床と人が一人入れるくらいの小さな部屋になってしまった。

四、ミキ先生とともに生きて

暫くして中島に新校舎が建設されることになり、ミキ先生も授業が終わってモンペ姿で一緒に行きました。スコップや鍬を持って竹やぶの根っこ起こしに行く、夜も遅くなって、先生も鍬をかつぎ暗い道を帰る途中、声を出して泣きながら愚痴をこぼされた事があります。余程辛かったのでしょうか。その姿は今でも忘れる事は出来ません。色々あって教室も建ち寄宿舎も二棟が完成しました。その舎監長として二年間勤めました。昭和三十四年度は二百三名、三十五年度は二百五十八名の寮生です。まだ若く未熟な私には重責すぎました。何をやっても叱られることばかりで、一年間は泣いて暮らす日が多かったように思います。

信念を持ちなさい、信念がないからだ、生徒さんの前で机をたたいて叱られて、どうしようもなく夜の三段峡行のバスに乗ってあてもなく往復した事もあります。今では良い思い出です。ミキ先生は毎日午後十時頃まで学校で仕事され、自宅に帰られても一日が終わった訳ではなく、寮での一日の出来事の報告と家計簿に目を通し、献立と一緒に考えて毎夜床につかれるのは十二時過ぎでした。二年目頃から私も少し馴れて来たのか、本館工事も着々と進んで先生も少し余裕をもたれたのか、休みに五、六人で飯盒炊さんに行ったり、先生も何でもお話しできるようになって、冗談も言って大笑いしたり楽しい思い出も沢山あります。笑われると金歯がよく光っていました。先生の友達で神石郡の方がこられたら、子供のように二人で服を脱いだり着たりして楽しめた事もあります。あれから三十二年余り、学校では多くの事を経験し学ばせて頂きました。一つも無駄な事はなく、物事を判断する時、行動する時、迷った時、辞書のように先生の言葉が浮かんで来ました。人間は地位や名誉や学歴だけが立派な人ではない、役立つ人になれ、死ぬる時に到達する人格の高さで人間としての価値が決まると話して下さいました。

先生本当に有難うございました。私達も卒業生として恥じないよう頑張って生きて行きます。